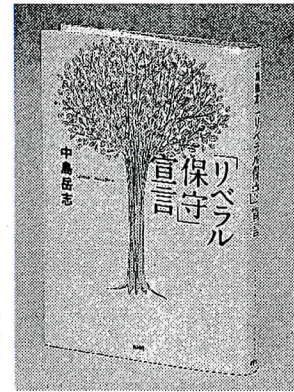


理性の限界と向き合う

中島岳志著

「リベラル保守」宣言

(新潮社・1470円)



なかじま・たけし 1975年生まれ。北海道大公共政策大学院准教授。著書に『中村屋のボース』『秋葉原事件』など。

リベラル保守。多くの読者には馴染みの薄い言葉に違いない。二項対立的発想からすれば、保守とリベラルは対立する両極ということになるからである。しかし、保守思想の中にこそ自由を積極的に擁護する側面があると本書は主張する。リベラルと保守を対立的に捉えるのではなく、リベラルが理想とする自由の理念を形づくるものとして保守思想を提示する。それが「リベラル保守」宣言である。

著者は英国の保守主義者、エドモンド・バークやマイケル・オークショット、そして西部邁を引きながら「保守のエッセンス」を論じていく。人間は共同体や社会に関係づけられながら、特定の時間と空間を生きている。言葉を換えれば、抽象的な「個人」「自由」など存在しない。「自由」は社会や慣習によって規定されている。この限界を正しく認識することから保守思想は始まる。理性によって「理想社会」を作ろうとする理性万能主義を排し、慣習や伝統、社会の関係性を尊重し、目配りしながら、同時に各人の自由を守ることができると考える思想こそ保守のエッセンス、つまりリベラル保守であると筆者は主張する。保守とは本来、復古でも反動でもないのだ。

人間の限界から社会を考え、節度ある自由を擁護するというリベラル保守の視点に立って、筆者は原発や貧困問題、大東亜戦争、震災の教訓など個別のテーマを掘り下げていく。その過程でクロスアップされるのは、理性的な人間が合理的な設計図を描くことによって社会を完全に運営できるという過信につながる。「理性主義」「設計主義」の危険性である。例えば、大東亜戦争の失敗を「極端なまでの設計主義とグロバルな改造主義」の挫折と著者は見る。

東日本大震災と原発事故は、理性が描いた「合理的な設計図」の崩壊であり、私たちの社会が制御できない危険を抱えながら存続しているという事実を突きつけた。人間の力を過信することなく、理性の限界と真摯に向き合うリベラル保守。極めて現代的な意義を持つ問題提起である。(九州大准教授・政治学 大賀哲)

西日本新聞 2013.9.29